

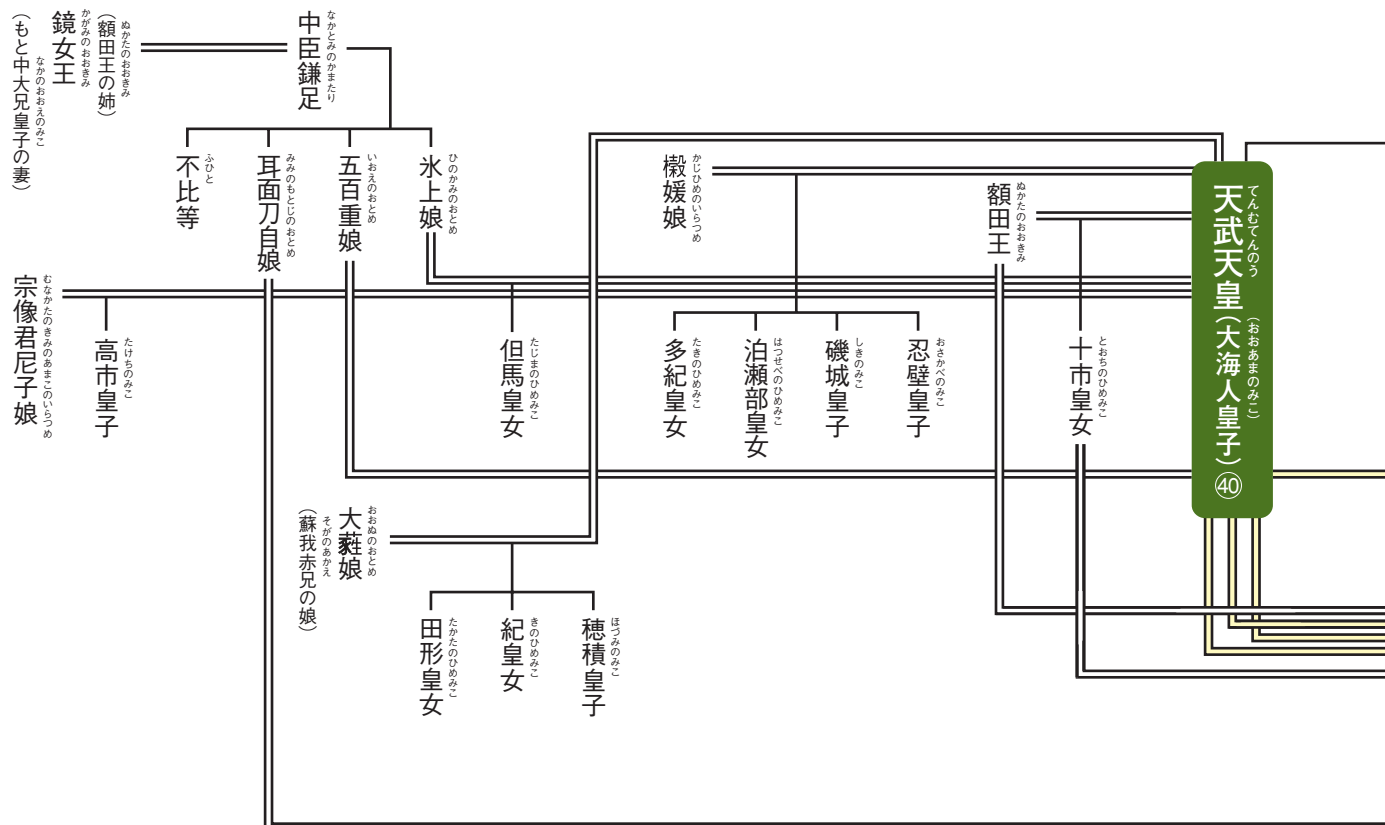
古代にもあった関ヶ原の戦い 「壬申の乱」はこうして起きた

とにかくこの世は非情なもの。頼りと思う身内がいちばんの災いの元となることがある。

織田信長に伊達政宗、徳川家光も、皆同じ父母から生まれた実弟を死に追いやった。ひとえに家の分裂を未然に防ぐためである。今回取り上げる「壬申の乱」では、天智天皇（中大兄皇子）の長子大友皇子と天皇の実弟の大海人皇子が皇位をめぐって争う。しかもその過程で、身内や親族が次々に殺されてゆく。災いの芽をあらかじめ摘まんがために。

登場人物系図

—— 婚姻 —— 肉親 ○ 数字=天皇代数



出所:里中満智子著「天上の虹」をもとに筆者作成

天智天皇ははじめ弟の大海人皇子^(注3)を皇太子に
おおあまのみこ
 と考えていた。しかし、天智天皇の愛する采女^{(古代}
うぬめ
やかこのいらつめ
 の下級女官)の宅子娘^(注4)が産んだ大友皇子がたく
おおとものみこ
 ましく成長するにつれ、彼に皇位を継がせようとする
 ようになっていった。しかし、これは当時の慣例に反す
 ることで大友の近江朝廷を支持しない地方豪族たちが、
 大海人皇子を押し立てて中央豪族と地方豪族の戦い
 となった側面も一部ある。

I. この当時は、まだ「天皇」という言葉は使われていない。
おきみ 「大王」とか「天王」と呼ばれていた。「天皇」という
てんおう 呼び名が定まったのは、おそらく天武天皇（大海人
きさき 皇子）の時代か、あるいは后が彼の後を継いで持統
 天皇（注5）となってからのことである。ただ、ここでは
 便宜的に天皇という言葉を用いることとした。



II.叔父（伯父）と姪の結婚は当たり前。父親が母親が違えば兄弟姉妹でも結婚できた。

現に天智天皇の娘4人が伯父である大海人皇子に嫁いでいる。

大田皇女（遠智娘^(注6)）の長女。大津皇子と大伯^{おおくにの}皇子を産む。）

讃良皇女（遠智娘の次女。後の持統天皇^{くさかべの}）皇子を産む。）

大江皇女（母は色夫古娘^(注8)）長皇子^{ながのみこ} 弓削皇子^{ゆげのみこ}を産む。）

新田部皇女（母は橘娘^(注9)）舍人皇子^{とねりみこ}を産む。）

III.天皇に40歳以上の兄弟があるときは、彼らが第一位の皇位継承者となり天皇の長子はその次に置かれた。この頃では大和朝廷はまだ全国の豪族を磐石に従えていたわけではないので、血の繋がりによりも武人の長としての才覚や、豪族を束ねる力量、戦さにおける指揮能力等々が要求されていたのである。

IV.天皇の実子であっても、その母親の生まれが皇族か、近い先祖に皇族を持つものでないと皇位継承権があると認められなかった。この点、大友皇子は母が下級女官であったため、本来は皇位継承権自体がないと考えられていた。

しかし、父天智天皇は、自分の権力でもって無理押しして大友皇子を皇位に就かせようとしたのが「壬申の乱」の一因となったのである。

さて、ドラマは「壬申の乱」の前史、中大兄皇子（後の天智天皇）が権力を掌握した、クーデターの日に遡る。

1 乙巳の変

蘇我本家は、天皇家と姻戚関係をもち、それをバックに勢力を拡大することを図ってきた。628年、推古天皇が後継者を定めずして崩御した。この時、皇位継承の

権利を持つのは、田村皇子^{たむらのみこ}（^(注10)）と聖徳太子の長子である山背大兄王^{やましのおおえのおう}（^(注11)）の二人であった。そこで蘇我馬子は自分の娘蘇我法提郎女の夫である田村皇子を天皇にすべく、山背大兄王の殺害をたくらみ、斑鳩を攻めて山背大兄王を殺したのである。その結果、田村皇子が舒明天皇として即位した。その後、舒明天皇は宝姫王とも結ばれ、中大兄皇子と大海人皇子と間人皇女を産んでいる。

641年、舒明天皇が崩御すると、蘇我入鹿は蘇我の血筋を受け継ぐ古人大兄皇子を36代天皇にするべく画策した。

すがすがしいそよ風の吹く朝、中大兄皇子と中臣鎌足が学問僧、南淵請安のいる学堂に向かってなにやら難しそうな顔で歩いていた。中臣氏は祭祀を取り仕切る家柄で格も高くはなく政治に関われる身分ではなかった。しかし、鎌足には皇子に近づくことで蘇我氏を追い落そうという下心があった。

「皇子さま、近頃、蘇我蝦夷と長子^{みなぶちのしょうあん}の入鹿が、舒明天皇のあとの皇位を古人大兄皇子に継がせようと画策していることをご存知ですか。」

鎌足は中大兄皇子の心のうちを探るようにその顔を見た。

「それは私も聞き及んでいる。」

「皇子さまは、どうお考えでございますか。」

「このまま古人が皇位につけば、蘇我は一層勢力を伸ばし天皇家を傀儡として倭国の政治をわがものにするであろう。」

「これ以上蘇我を勢いづけさせれば、ゆくゆくは天皇家にも災いが及びましょう。」

「入鹿は皇極天皇（中大兄皇子の母）の信頼をよいことに、権力をほしいままにしている。もちろん、放っておく訳にはいかない。しかし、蘇我の兵力は侮れないし一筋縄ではいくまい。」

「そこで、この鎌足の話を書いていただけませんか。」

鎌足は計画を話しはじめた。

「蘇我入鹿は、常に護衛の家来たちを伴って身の安全を

と石川麻呂は身を乗り出した。



綿密に打ち合わせた。式場で入鹿の首を刎ねたのち、石川麻呂が分家の兵と朝廷の兵を率いて蝦夷邸を襲撃することになった。

ちょうどおなじころ、中大兄皇子は叔父である軽皇子の屋敷を密かに訪ねていた。彼は次の皇位にご推挙することを餌に軽皇子を謀略に巻き込んだ。

ついに、運命の645年6月13日、三韓からの貢物を献上する儀式が厳かにはじまった。主要豪族が大極殿に参列し、蘇我石川麻呂が献上品の目録を読み上げはじめたそのとき、中大兄皇子が大声で「覚悟!入鹿。」

と言いつつ面前に迫って渾身の力で切りつけた。

入鹿は

「皇子殿 ご乱心か!」

と叫びながら、後ずさりして逃げようとする。

皇極天皇はじめ豪族たちはこの一瞬の出来事に驚愕して、息を呑んで凍り付くのみであった。中大兄皇子は「鎌足、首を刎ねよ」

と命じた瞬間、入鹿の首は床にころがり落ちた。そのとき、軽皇子が警備の兵たちを鎮め、豪族たちにも静まるように呼びかけた。中大兄皇子の母である皇極天皇は、

何も言えず立ちつくすのみであった。

中大兄皇子は皆に、蘇我本家の悪行の数々を並べ上げ、それを天に代わって成敗したと説明した。蘇我の一族も賛同し、誰も異論を申し立てる者はなかった。蘇我石川麻呂はただちに朝廷の兵を率いて蝦夷の屋敷を急襲した。蝦夷は覚悟を決め自邸に火をかけて自害した。蘇我の本家はこうして滅亡したのである。

こののち、皇極天皇は退位し、軽皇子が36代孝徳天皇として即位する。また、蘇我石川麻呂が右大臣に、中臣鎌足が内大臣に昇格した。

孝徳天皇の即位後も、政治の実権は中大兄皇子が握っていた。中大兄皇子は自分の政敵を容赦なく亡きものにしていった。彼の理想は天皇を中心とした強固な中央集権国家である。それゆえ王権を脅かす可能性がある人物は、たとえ親族であろうと容赦せず抹殺した。

豪族たちが皇位継承権のある皇子を担いで天皇とし、中大兄の勢力を弱めんがための内乱を興す可能性は十分に考えられた。中大兄皇子の時代は、まだ天皇の権力は絶対ではなく、豪族たちによる分権国家の様相を残していた。したがって、それぞれの豪族は皇位

関連年表

日本	朝鮮	中国
628年 推古天皇崩。(33代) 629年 舒明天皇即位。(34代) 641年 舒明天皇崩御。 642年 舒明天皇の皇后宝姫王が皇極天皇(35代)として即位。 645年 乙巳の変 中大兄皇子が蘇我入鹿を討つ。 646年 軽皇子が孝徳天皇として即位。(36代) 655年 孝徳天皇崩御後、皇極天皇が斉明天皇として再び即位。(37代) 663年 白村江の戦い 668年 天智天皇即位。(38代) 672年 壬申の乱	 660年 百済滅亡 668年 高句麗滅亡	618年 隋滅び唐が興る

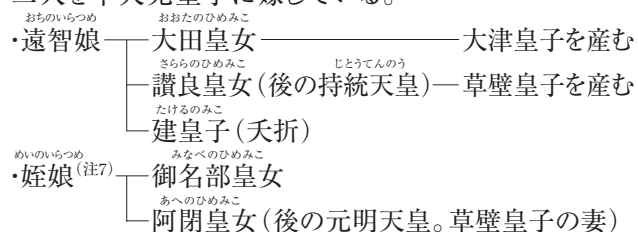
継承権のある皇子と繋がりをもっていた。

まず中大兄皇子が狙ったのは、蘇我入鹿が舒明天皇の継承者として推挙していた古人大兄皇子であった。入鹿が殺害されると、後盾を失った古人大兄皇子は吉野に出家した。

しかし、ある豪族の野心のため彼を担ぎ出す兆しがあったため、謀反の罪で吉野を攻めて古人大兄皇子を自害させた。後盾となった豪族も滅亡した。古人大兄皇子は中大兄皇子の腹ちがいの兄にあたり、かつ妻倭媛やまとひめの父でもある。この非情さは、権力を掌握しなければ思うことをなし遂げられないものの宿命であった。

645年の大化から668年に天智天皇として即位するまでの23年間、自ら天皇に即位せず常に皇太子の地位にあって、実権を完全に握っていた理由は明確でないが、おそらくそのほうが動きやすく、時が熟した時こそ天皇に即位する時機と考えたと思われる。

蘇我石川麻呂は皇族と親戚筋になることを狙い、娘二人を中大兄皇子に嫁している。



しかし、石川麻呂は、右大臣として権勢を持ちだした頃、実弟の日向の讒言により謀反の嫌疑をかけられ、中大兄皇子に攻められて自害に追い込まれた。けれどもこれは、日向が実兄(石川麻呂)を追い落とすためのまったくの讒言であった。よく調べもせず処断した中大兄皇子の失態であり、公平に両当事者から言い分を聞かず近親者の意見のみで処断した皇子のやり方に、他の豪族は明日はわが身と不安を感じ少しずつ皇子との距離を置き始めていった。

654年、孝徳天皇が崩御する。

孝徳天皇の長子有間皇子(中大兄皇子のいとこ)を、

「父を天皇として即位させながら実権を持たせなかったのは中大兄皇子であります。彼を討ちましょう。」

と蘇我赤兄あかえは巧みな言葉でそそのかして、中大兄皇子を殺す謀議に参加させた。その赤兄に裏切られ謀議の首謀者として訴えられて謀反の罪で処刑された憐れな有間皇子であった。実は、中大兄皇子と蘇我赤兄あかえが企んだことだったのである。

こうして、中大兄皇子が権力基盤を固めるための犠牲になった主な者は、次のようである。

- ・蘇我蝦夷及び入鹿
- ・蘇我石川麻呂(義父)
- ・有間皇子(いとこ)
- ・古人大兄皇子(異母兄弟)

頼りになるはずの身内でも災いの元になる可能性を考えれば、抹殺することもやむなしという論理である。孝徳天皇の崩御のあとへ、皇極天皇である中大兄皇子の母が、斉明天皇(注12)として再び即位した。

2 大化の改新

中大兄皇子は、豪族たちが地域の長として分権体制となっていた倭国を、天皇を中心とする強力な中央集権体制に道を替えようとしていた。そのためには豪族たちが支配している土地や部民を朝廷の直轄下におく必要があった(公地公民)。しかし、いっさいの利権が朝廷の支配下に置かれることには、豪族の大多数の猛反対にあうはずであった。そこで、豪族には朝廷の冠位を与え、国の政治に参画できる冠位十九階(注13)をつくって国論に参画できるようにした。また、豪族たちはステータスが上がることで満足した。中大兄皇子は彼らを朝廷の官僚として組み込んでいった。

一方、戸籍と計帳(注14)を作成させ税を家族数等々勘案し取り立てるようにした。これにより朝廷の税収は飛躍的に増えていった。これによって、国土全体を国、郡(こおり)、県(あがた)として整理し整備した。土地を分け与えるかわりに、租、庸、調の制度を設け、税や

労役を義務づけた。こうして墳墓の建設や有事に備える基礎が固められ、現場の指揮官に地方豪族を充てたので、次第に地方の指揮系統も整備されていった。こうした古い慣習を打破した法治国家の体制が国力の増強につながったのである。

一方隣国、朝鮮半島の情勢にはかなりの変化があらわれていた。友好国である百済は新羅の侵略を受け、高句麗は唐と新羅の侵略を受けていた。そこで、百済は高句麗と同盟し、一方新羅は唐と同盟関係を結んでいた。

そこで百済から救援を求める使者がやってきたのである。中大兄皇子はさっそく重臣を集めて朝議をおこなった。中大兄皇子は百済救援を主張。その取り巻きの豪族も、倭国の行く末のことよりも中大兄皇子の不興を買うことを恐れて同意していた。しかし、ひとり大海人皇子だけは、唐の国力、新羅の勢いを勘案すれば無謀な戦いであるとして強力に反対した。

朝議は結論が出ず、堂々めぐりを繰り返し結局、中大兄皇子に一任ということになった。中大兄皇子は、「では、今回は食料等の救援のみとし、兵は出せぬ。すくなくとも一年は持ちこたえられよと使者に伝えよ。」と命じた。しかし、百済は残念ながら3ヵ月後の660年に滅亡した。



百済滅亡後から3年後、倭国は百済の遺臣鬼室福信らきしつふくしんによる百済復興運動に協力し救援に乗り出した。しかし、双方の戦力の差は歴然としていた。

唐の戦力	130,000人	倭国軍	42,000人
船舶	300艘	船舶	170艘
新羅戦力	50,000人	百済軍	5,000人

白村江の戦いの結果は、始めからわかっていたようなものであった。船舶の大きさに10倍程の違いがあり、唐船には鉄板が側面に貼ってあってまったく弓等では歯が立たなかった。何とか帰還できた船でも、ほとんどが航行不能に近い状態であった。

大海人皇子の懸念したことが現実となり、倭国が唐に占領される可能性が高まった。しかし、唐が北狄ほくてき（モンゴル方面）の侵入や新羅との戦いで倭国と戦う余裕がなくなったために倭国は攻められずに済んだ。

けれども、天智天皇（中大兄皇子）の失策は大きい。せっかく大化の改新で増加した財源を、百済救済のための白村江の戦いで浪費したからである。さらに唐を敵に回したうえ山城や水城の建設を地方豪族の負担で建設させた。地方豪族の立場からみれば、白村江の戦いで資金を使い果たし、兵員も損害を受けた状態に加えての山城や水城の建設である。たまったものではなかった。天智天皇の統治能力に不満をもつのも当然である。これが「壬申の乱」で地方豪族が大海人皇子に味方する遠因となったと考えられる。

天智天皇に正論を言えるのは、もはや大海人皇子のみである。他の重臣は保身のためすべてイエスマンになっていった。天智天皇と大海人皇子の路線対立は明確になりだした頃、天智天皇の病がかなり進みだし立ち上がれない程に進行していった。

大海人皇子は直感的に、自分の身が危ないことを感じ政治から一切身を引きたいと申し出た。そして、数名の家来と讃良皇女と少々少々の女官だけを連れて大津を脱出し、吉野へはいった。大海人皇子が大津京を

大海人皇子の私有地はこの美濃である。「壬申の乱」で最強の精鋭部隊はこの美濃の兵であった。この皇位継承のための戦いが、この美濃を中心とした近江、大和、東海、伊勢で展開したのは興味深い。その約九百年後に同じ地で、関ヶ原の合戦という天下分け目の合戦が再び勃発したのであった。

壬申の乱 両陣営と主な戦場



(注14) 計帳…今の住民票謄本と財産明細を一緒にしたようなもの。公地として民衆に与えられた土地の生産高に家族構成、働き手など勘案して租として税金を払うための元帳。

「壬申の乱」 遠山美都男 中公新書